〈海外短信〉

小値賀の民泊　中国の農家楽

兪　彭年*

長崎県広報課が編集・発行している広報誌『にこり』2011年10月号は「おもてなしの島小値賀へ」という特集だった。『にこり』は長崎各地の自然と歴史と現状を知る上での格好の写真入り情報提供誌であるため、毎号紐解くのが楽しみとなり、興味深く読ませてもらっている。しいて欠陥といえば、写真の注釈の文字が小さすぎて読むのに目が疲れることだ。それはそれとして、いつものように10月号を興味深く読んでいると、「小値賀に来たならぜひ民泊を」、「民泊民家きよすみ」、「ヨシ子さんは民泊を受け入れる魅力について教えてくれた。それは『小値賀に居ながらにして、世界中の人たちと知り合えること』。」、「民泊では郷土料理体験で、島のお母さんと一緒に料理を楽しむ。」、「まさに地産地消の島ごはんに感激！島の恵と家族の温かさにじんとした。」、「民泊民家の私たちも親戚が遊びに来たと思って受け入れております。」、「今から５年前、観光客が小値賀に宿泊するといえば、それは野崎島でのキャンプを意味した。しかし、キャンプだけでは団体客の受け入れは難しい。こうした理由から誕生したのが『民泊』だった。５年前にわずか７軒でスタートした民泊民家も現在は33軒。今では島の大きな魅力になっている。昨年、小値賀はまた新たな取り組みに着手した。それが１棟貸切の『古民家ステイ』である。趣ある古い民家を新たに甦らせた贅沢な空間は、これまでとは異なる客を取り込むことに見事に成功。今や年間の観光客は人口の約３倍である。」、などの文字が脳裏に焼きついた。この小値賀の「民泊」は中国でいま流行っている「農家に泊まり、農家のごはんを食べ、農家での楽しさを味わう」という「農家楽」とよく似ている、或いは同じかもしれないと思った。そして、できれば自分も小値賀へ行って「民泊」を体験してみたいと思った。

中国の農家楽は1980年代ごろに四川省の成都市の郊外から興ったといわれる。その後人気が出て、四川盆地全体に広がり、そして今では全国に広がっている。農家楽はふつう次のように定義付けられている。ゆったりとした気分でくつろぐ憩い式の新たな旅行方式であり、都会の現代人が農家の提供する自然回帰の機会を利用して、たまったストレスを解消し、心身の癒しを図る、と。観光名所を巡る旅行ではなく、都会の喧噪を離れて農家に泊まりこんでゆたっりとくつろぐのが旅行の狙いだ。農家に泊まるので、ホテルのような高級な施設やサービスはないが、その分だけ費用節減のメリットがある。観光名所を巡るのではないため、移動費や入場料などの費用がかからず、それだけ費用の節減ができる。食事は地産地消の食材を使った「農

*県立シーボルト大学名誉教授、長崎県立大学リエゾンオフィサー

家飯」（郷土料理）であるため、新鮮で美味しく、普段とは違った味が楽しめる。さらに「農家飯」のコストが低いため、これもまた費用節減となる。泊まる農家の周囲は美しい自然や田園風景であるため、心が安らぎ、落ち着いてゆったりした気分でくつろぐことができて、都会でたまったストレスを解消できて、心身が癒される。だから農家楽の魅力は消費が合理的で、無駄や贅沢がなく、倹約的であることだ。

農家楽の雛形は国内外の農村旅行といわれる。農家楽の特徴は農村とその周囲の景観、それに地方の民俗とが溶け合ってかもし出す鮮明な郷土色にある。経済と社会の発展につれて都会で暮らす人たちの変化は、休みが増え、生活水準が高くなり、「文明病」や「都会病」などの進行が激しくなってきていることだ。そこで、都会の人びとは従来の旅行形態には満足できず、多様化した旅行を求めだしている。この変化が地方を訪れて風景・風物・史跡などを見て歩く観光型旅行からどこかに泊り込んでゆったりとくつろげる憩い型旅行への転換を促し、それに応えて生まれてきたのが正に農家楽なのだ。需要が新形態を生み出す法則に合致する。農家楽の誕生と発展は農村への旅行を充実させ、その進展を促している。そして、それによって農村の産業構造の転換が図られ、地域経済の構築と農業の市場化に大きく寄与して、よき経済効果をもたらしている。農家楽は農家に増収をもたらすばかりでなく、製品や市場や流通などのいろいろな情報をも得ることができて、農村と都会との橋渡しの役割を果たしている。保守がちな農村は新しい理念、新しい考えなどによって新しい発展の契機をつかむことができるようになった。したがって、農家楽は都会の人びとに歓迎されるばかりでなく、農家の人びとにも歓迎されている。

中国の農家楽はだいたい次の四種類に分けられている。

園芸型農家楽。農家が花卉、盆栽、苗木、接ぎ台などの園芸を経営しているため、泊まる客人はこれらの園芸をゆっくりと観賞できて、園芸技術の学習や交流にもなる。いま中国では生活にゆとりが出てきて、趣味としての園芸が流行り、園芸愛好者の数は年々増えている。あの気の狂った文化大革命時代では園芸趣味はブルジョア的趣味と批判され、叩かれた。改革・開放後は生活を美化するものだと高く評価され、生け花（中国では「挿花」という）、鉢植え、盆栽などがどこにでも目にするようになった。

果樹園型農家楽。農家が果樹園を経営しているため、泊まる客人は開花期であればゆっくりと花の観賞ができて、収穫期であれば新鮮な果実がたっぷり味わえる。いま中国では花の観賞が流行りだして、わざわざ花見に家族そろって出かけたり、友人を誘って出かけたりするのがたいへん多くなった。それであちらこちらのいつからいつまでの花祭りを催す情報が飛び交う。梅の花祭り、チューリップ祭り、菜の花祭り、桃の花祭り、桜の花祭り、水仙の花祭り、牡丹の花祭り、蓮の花祭り、菊の花祭り、などなど。それから、苺狩り、ぶどう狩り、みかん狩りなども流行りだしている。

自然景観内旅館型農家楽。山の麓、山の中腹、山の上、川のほとり、山中道路わきなどに位置する農家が改修または拡張して簡易旅館にして客人を泊める。自然に囲まれて山中にこもる気分がかもし出される。空気も水もよく、夏であれば、都会より涼しく、避暑ともなる。せせらぎや鳥の鳴き声を聞いたり、閑寂な山道をゆっくりと散策したりするなどは山中における悠然、自然回帰そのものだ。

庭園客舎型農家楽。農地に広大な庭園を作

り、その中に客舎を点在させて客人を泊める。あたかも庭園内に暮らすような雰囲気をかもし出す。退屈防止としてマージャン室、カラオケ室、中国将棋室、テニスコート、バスケットボールコートなどを整備し、魚釣りもできるようにしてある。レストランが整備されて、料理が注文できるようになっている。このような農家楽は都市の郊外に多く、週末を利用してくる客人が大多数。家族で自家用車を乗り付けてくるのも少なくない。会議室なども整備してあるため、会社などが会議召集兼休息に利用することも多い。しかし、農家楽とは唱えるものの、本来の農家楽とはややかけ離れたものであることは否めない。

農家楽の大発展によってもたらされている問題も次第に深刻化してきている。まずはごみ処理問題だ。大勢の人が何日も長く滞在するため、出るごみが増える。そのごみを昔のように自然浄化による処理では処理できなくなってきている。有効な対策がまだ打ち出されず、問題はますます深刻化し、環境破壊、生態破壊につながっていく。次は、商業意識が強くなって、近代化を追い求めだし、宿泊施設の高級化・環境の都市化などが目立ち、農家楽の本来の郷土色を失いだしている。第三は厳格な検査制度と許可制度の整備と貫徹がまだ不十分であることだ。衛生許可、安全許可、経営許可、それに従業員養成などの制度を健全にして、厳格に管理する必要に迫られている。

私は2009年、2010年、2011年と３年続けて夫婦で浙江省にある農家楽に出かけている。上海の７月はいちばん暑い時期で、初旬に梅雨が明けると、とたんにぐっと蒸し暑くなる。そこで避暑として行くようになった。３回とも自然景観内旅館型農家楽で６泊７日間で、料金は2009年と2010年は一人500元だったが、2011年はインフレの関係か一人600元になった。上海の旅行社がすべて手配してくれて、私たちはただ付いていくだけでよかった。2009年と2010年は山中の農家楽だったので、避暑ができて暑さを感じなかった。2011年は平野の道路脇の農家楽だったため、暑くてやりきれなかった。旅行団の人数は30人で、そのうち私たちと同行した友人が８人だった。食事はひとテーブル10人なので、私たちはちょうどよくいつもひとテーブルを占めて、おしゃべりしながら楽しく食事ができた。初日は朝７時に上海からバスで出発して、昼ごろに目的地に着いて、昼食を農家楽で取った。最後の日は昼食を少し早めに取って、バスで上海に向かい、午後５時前に上海に着いた。行きと帰りの時間の按配は都合よかった。農家楽に着いた翌日からは午前中は周囲の散策や山登りや風景・風物・史跡巡りなどで過ごし、昼前に戻って昼食を取った。もちろん参加は自由なので、選択できて、内容によって行かない人もいた。昼食後は昼寝で、その時間は人によって違うが、だいたい１時間から２時間だった。昼寝の後は、読書やマージャンやトランプや中国将棋などをしたりして過ごす人が多かったが、私たちはよもやま話をして楽しんだ。夕食後は日が暮れるまで連れ立って周りを散策したりした。夜は読書かテレビでニュース番組やテレビドラマ番組を見て過ごした。だいたいみな早寝早起きだった。農家楽での日々は何にも気を遣うことがなく、本当にのんびりと、ゆったりとくつろぐことができた。友人たちと一緒なので心ゆくまで話ができて楽しい毎日だった。このような過ごし方はまさに農家楽での楽しさを味わうというものであった。それなので、私たちは今後も毎年の夏に友人を誘って農家楽に出かけるつもりでいる。

『おもてなしの島小値賀へ』の特集には、小

値賀の風景や風物や史跡などが紹介されていた。日本名松百選にも選ばれた島の名所「姫の松原」、柳地区の名勝「五両だき」、「五両だき」の前に広がる絵のような風景、真っ白なアーチ型の斑大橋、玉石大明神、国の天然記念物「ポットホール」、小値賀を支える観光資源である野崎島、小値賀港近くの朝市、小値賀町歴史民俗資料館、幻の落花生と呼ばれる「納島の落花生」、小値賀焼き、小値賀郷土料理、海の幸、などなどだ。それに親切で純朴な島の人たちとの触れ合いがある。島のターミナルではレンタサイクルが申し込めるという。小値賀はとてもなだらかなので、サイクリングは快適だという。これだけのものがあれば、小値賀での民泊は絶対退屈などはしないだろう。まして回りは海だから、魚釣りもできて楽しみいっぱいだ。これで小値賀の民泊が島の大きな魅力になったことが充分うなずける。

長崎と上海を海路で結ぶ上海航路が復活した。この航路が長崎旅行に出かける上海人観光客増加にかける期待は大きいといわれている。それもそのはず、距離的にいちばん近く、長崎と長い交流の歴史を持つ上海は、現在の常住人口が2300万人、そのうち定年退職者が350万人といわれる。定年退職者だけを長崎旅行に取り込んでも相当な数になる。実際、いま国内旅行や海外旅行、それに農家楽に出かける定年退職者はかなりいる。長崎への旅行形態を、観光型、花見型、温泉型、民泊型、民泊兼観光型、民泊兼湯治型などと多様化させれば、選択肢と魅力が増えて、長崎旅行に出かける人たちはきっと増加するに違いない。海外旅行を体験した上海人が日本旅行に対する評価は次のとおり。社会が成熟していていちばん安全、行く先々がいちばん清潔で気持ちよい、買い物などは商品の品質や価格においていちばん安心できる、旅先のサービスがいちばんよい、接する人びとのマナーがいちばんよい、公衆トイレなどの施設がいちばん整っていて心配しなくてよい、などだ。これはあちらこちらと海外旅行して比較して出された定評といえよう。この定評を基盤に工夫を重ねれば上海から長崎への旅行はますます盛んになる。